

なつかしい臨床実習

著者	長谷川 貴子
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	10
ページ	60-60
発行年	2005-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/539

なつかしい臨床実習



看護学科6期生 長谷川 貴子

平成15年、新潟県立看護短期大学を卒業し、私は看護師として日々懸命に働いています。看護師として病院で働きはじめた頃は、考えもつかないくらいの忙しさ、大変さ、恐怖感との戦いでした。仕事中は神経を張り詰め、家に帰ったら睡魔と戦いながらの勉強。それは学生時代と比べられないくらい大変でした。患者様の命を預かっているという責任の重さから逃げ出さなくなる事も何度もありましたが、周りの人達に支えられながら頑張っていると思います。

私の勤めている病院は、付属の看護学校があり、看護の道を選んだ学生達が毎日実習に来ています。ある学生が注意されて落ち込んでいる時、もう1人の学生が励ましている姿を見ていると、自分の学生時代を思い出し、懐かしく思います。実習は大変でしたが、そんな辛い実習を乗り越えられたのは、何よりも仲間の存在が大きかったと思います。

実習は、グループで色々な病棟をまわっていきます。実習時期は、一人暮らしの人はもちろん、実家から通っている人は家族より長く実習グループの仲間と過ごすため、グループの仲間は実習を乗り越えていくにあたって重要になるのです。私のグループは5人で、はじめは知らない人もいました。最初の実習は人見知りしていたのかおとなしかった私達も、慣れか、ストレスか、仲良くなったからと信じたいのですが、何でも言い合える良い関係になっていきました。

実習で、誰か1人が悩み行き詰まると、自分の事で精一杯のはずなのにみんな親身になって考え、解決していきました。そして実習がひと区切りつくたびに「お疲れ会」をし、その実習での学びや出来事を話し合い、みんなで共有していきました。周りの友人からも、「ほんとに仲いいね」と何度も言われ自慢のグループでした。

そんな私達も卒業して、今は県内外で看護師・保健師として患者様や地域住民の皆様のために一生懸命頑張っています。もちろんそれぞれの場所で新たな人間関係を築き、生活していますが、卒業して2～3年経った今でもグループみんなで会い、実習時代の話や今の悩み・出来事を話したりして励ましあっています。あの頃と変わらず、患者さんを一生懸命思うみんなを見ていると、とても嬉しく安心できます。中には結婚し、家庭を持ちながら働いている人もいますが、私達の間はこの先も変わることなく続いていくと信じています。

短大は大学へと変わり、さらなる飛躍をしていくことと思いますが、新潟県立看護短期大学での生活は、私を含め、卒業生の中で色褪せることはないと思います。私は、新潟県立看護短期大学で良い仲間と出会え、あたたかい環境で楽しく学ばせていただいた事をとても感謝し、誇りに思っています。